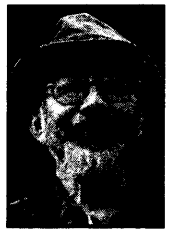

追悼　桝本純さんを偲んで

桂木行人

「三多摩バラの会」の事務所が中央線武蔵小金井駅前にできたのが、一九六〇年代の終わりだった。

小さなアパートを事務所にしたもので、そこの借主が桝本さん（われわれは「純ちゃん」と呼んでいた）だった。彼以外には会社勤めの信用ある社会人はいなかったからだ。「バラの会」などという名前も桝本さんがつけたもので秘密結社・薔薇十字団にひそめた名前だったに違いない。彼は、三多摩生まれの新選組も好きだった。

この事務所には、沿線の過激派の高校生が集まり、夜中に酒を飲んで騒いで、大家に苦情を言われ、そのたびに高校生たちを呼びつけお説教をしていたのも、桝本さんだった。

この事務所が、ブント三多摩地区委員会のアジトで、そこから叛旗派が生まれる。

もっと時期を確かめると、六八年一〇・二二の前だったことが思い出される。事務所で、神津陽などと、一〇・二一国際反戦デーに向けての方針会議があった。その一年前、六七年八月ごろ新宿駅でアメリカ軍の横田基地に向かってジェット燃料を積んだタンクローリー貨車が衝突炎上した。ヴェトナムに飛ぶB52などの燃料だ。これで「米タン闘争」が起こり新宿駅をめちゃくちゃにし、大衆闘争への手ごたえを感じていたころだ。純ちゃんもわれわれ大学生も「新宿騒乱」派だった。

ところが、ブント中央は「防衛庁」（六本木）。解放派は「国会・霞が関」。中核やML、四トロが新宿。「どうする」。ブントの戦術会議に出て行って「新宿だ、大衆運動だ」と言ったら、ヘルメットを投げられ「バカヤロウ、政治闘争だ、従え」。結局、中大から丸太担いで防衛庁。純ちゃんは、「じゃあ、防衛庁に回ってから新宿に行こう」と軽い。

その年の十一月に、共産同三多摩地区委員会の機関誌『叛旗』が創刊された。一号は神津陽の「共同体論」（のちに現代思潮社刊「蒼茫の叛旗」）。二号が川田洋（桝本のペンネーム）の「沖縄論」だった。『甘藷伐採期の思想』（森秀人）などを参照にしたこの原稿に、私たちは溜飲を下げたものだ。七二年に米軍から沖縄の施政権が日本に返還されることをめぐって、奪還論や、独立論が飛び交う中で「沖縄の歴史過程を見ろ」と時代のフレームを差し出していた。

この原稿は、六八年に創刊された雑誌『情況』の七一年四月号に加筆掲載され、現在でもネットで読むことができる。（本誌一九八頁に抜粋を再掲）

思い出せば、大学の同級生に「沖縄からの国費留学生」がいて、彼はパスポートをもって大学に通っていた。そんな時代だ。

後に、普天間基地移設問題が起こった時、若い人たちが「桝本・沖縄論」の学習会を開いているのを聞いて、うれしく思ったものだ。現在の辺野古でも、沖縄の歴史過程を押さえなければ、所詮「反米、反政府」にしかならない浅薄な議論だ。

桝本さんは、その後、同盟の研究員となり、連合へ移り、連合のシンクタンクである連合総研の副所長を務めた。この間の事情はよく分からないが、労働法や年金、介護保険などの制度設計をめぐって厚生労働省とやりあっていたようだ。ちょうど、村木厚子次官のころだろう。そのころ、「村木さんは無罪だよ」と言っていたことがある。

最近、首里城の正殿が焼けた。その時、脳裏を走ったのが純ちゃんの「沖縄論」だったし、実際に首里城を訪れたときの配置記憶である（左が薩摩、右が清）。もう一度、純ちゃんと「華夷秩序、琉球処分から、サンフランシスコ条約」の話をしてみたいものだ。決して、文化財の焼失―再建のフレームだけではない歴史が見えてくるはずだ。

晩年は目を患い、買い物も思うに任せず、信号や横断歩道の車線やスーパーの値札が読めないといっていた。それでも「なぜ社会党はなくなったのか」と考えていた。

また、桝本さんの「厚生政策」を中心にした「聞き書き」の本を出そうという約束もかなわなかった。

六〇年安保の高校生世代（当時高校三年生）がまた一人いなくなった。彼らの世代は、自分たちのことを「サリドマイド・ベビー」と呼んでいた。

「桝本純さんを偲ぶ会」への弔辞

山城博治

桝本純さんを偲ぶ会にご参加の皆さまこんばんは。

桝本純さんがお亡くなりになられたとの報せを受けて、その早すぎるご逝去を悼み、お集まりの皆さまと共に心からそのご冥福をお祈りいたします。

私は、かつて沖縄の日本への施政権返還が日米で合意された一九六九年から七〇年安保闘争そして一九七二年の沖縄返還に至るまさに激動の時代に桝本さんに出会い多くのご指導を頂いた者の一人として、いくつかの思い出やたまわったご指導の一端をご披露させて頂いて故人に対する感謝とご冥福を祈る言葉とさせていただければと思います。

私は一九七〇年の五～六月頃、桝本さんと沖縄中部地域の反戦青年団体の事務所で初めてお会いしました。

その当時の沖縄は、まやかしの返還協定が県民要求とはあまりにかけ離れた内容であったこと、その協定に沿った沖縄返還が数年後には否応なしにやってくることへの不安と怒り。また米軍のベトナム戦争の後退局面から数万人規模で軍で働く民間人労働者が大量解雇され、それに対して熾烈を極めた解雇撤回闘争、言うところの全軍労闘争が社会全体を巻き込んで激しく燃え広がっている頃でした。他方で七〇年安保闘争が沖縄現地の激しい社会運動と合流する形で全国から学生を中心に多くの若者たちが沖縄に闘いの場を求めて流れ込んで、全軍労闘争や反復帰闘争に加わり運動がさらに加熱拡大するまさに動乱を極めるとも言える時代でした。

しかしそれにもかかわらず他方では、日米政府権力に買い取られるように潰えていく「祖国復帰」運動に変わり得る新しい運動その思想と行動方針が、政党や労働組合また学者文化人などどこからも明確な提示が行われず混迷を深め混沌とした状況にありました。「日本は祖国たりうるか？」盲目的に突き進んだ復帰運動への悔悟・絶望から発せられた当然の問い掛けではあった。長い歴史を通じて幾たびか発せられた根源的な問いがまた装いを新たに発せられた。沖縄社会は出口のない混迷の淵で喘いでいるように思えた。

そんな折桝本さんは颯爽と現れました。沖縄の人間とは明らかに異なる色白で面長な相貌にパラパラとあご髭をたくわえ痩躯な見るからに学者インテリ然とした近寄りがたい存在に思えました。

桝本さんの主張はそれまで県内のあらゆる場所で局面で論じられた議論とは異質で次元の違う衝撃的な論議でした。その後一九七一年に雑誌情況にまとめられた『国境・国家・第三次琉球処分』は彼の思想を端的にかつあまねく表現するものとして、中部地区反戦青年委員会の皆さんはその難解で硬質な文体と悪戦苦闘していたように覚えています。当時高校を出たばかりの私などには歯が立つものでなかったことは言うまでもありません。ただその語られる話しから論旨を伺い知るのみでした。

今回このメッセージを記すに際してあらためてこの論稿に目を通して、今更ながら当時二十代の若さで、古今東西とりわけ日本、沖縄、朝鮮、中国、台湾を通じた歴史、とりわけ日本帝国主義が刻んだ惨劇の歴史を国境を越えた一つエリアの全体像として描き俯瞰し、その上で模索されるべき沖縄の社会運動が、単にそれまで激しく語られる論議すなわち「復帰・反復帰」「大和・反大和」「反日・独立」など沖縄問題を国内問題に限定して二項対立の形で捉える思考パターンに覚醒を迫る今日なお斬新で押さえられなければならない重要な視点を提示していたことに驚嘆するとともに、あらためてその思索の営為の極みに尊宗の念を新たにするものです。

ややもすると沖縄の置かれた状況を対大和の関係に囲いがちな思考に、帝国主義の時代を背景とする「資本」の得体の知れない汎地球的な動態、そこに絡め取られ圧殺されていく国家国境を越えた地球規模の地域で現出する現代資本主義社会の根源的悲劇。そのことを覚知した上であらためて日米の支配に立ち向かう沖縄大衆運動の再生を求める問題提起に眼を見張るものです。

残念ながらその思索を持ってしても今日なお日米両政府権力から翻弄され続ける沖縄の状況を好転させる具体的な提起を行えなかったと感じられるのは残念と言うほかありませんが、奇想天外な問題提起で良しとするならいざ知らず責任ある立場では簡単には言えないこと、不可抗力なことと按ずるほかありますまい。飽くなき探求飽くなき渇望を堅持し続けるほかないとの思いを新たにするものです。

私は齢七十にならんとする今日まで、新川明さんや川満信一さんが提起した『反復帰』論に込められた大和を徹底的に異化・相対化し沖縄の主体性を確立していく視点と桝本さんの「カワッタヨー」の国際的グローバリズムな視点の保持を心掛けて今日にいたったように思います。またその両視点なしに巨大な日米の政府相手にする沖縄で反戦平和運動なんかできません。これからも天才的思想家にしてアジテーターであった桝本純さんの教えに違わぬよう刻苦勉励努めていきたいと思います。そして本日ご参会の皆さま共に思索し手を携えて参りましょう。

桝本さんありがとうございました。

どうぞ安らかにお眠りください。そして天上より遅々たる営為の歩み努力を見守りください。合掌。

二〇一九年十二月十一日